

様式第 1 1 号（第 1 4 条関係）

富士見市採択協働事業完了報告書

令和 7 年 2 月 2 7 日

（宛先）富士見市長

	団体の名称	対話カフェつむぎ
	代表者氏名	山下 真実
採択者	所 在 地	
	電 話 番 号	

採択協働事業(令和 6 年 3 月 2 9 日付け富協第 1 4 6 5-1 号)が完了しましたので、富士見市協働事業提案制度実施要綱第 1 4 条の規定により、次のとおり関係書類を添えて報告します。

1 報告事業の名称

こども対話カフェ（こども対象哲学カフェ）事業

2 添付書類

- (1) 事業報告書（様式第 1 2 号）
- (2) 収支決算書（様式第 1 3 号）
- (3) 事業を実施した成果が分かるもの

事業報告書

1 事業の概要

事業の名称	こども対話カフェ(こども対象哲学カフェ)事業
団体名	対話カフェつむぎ
協働した 市担当部署名	教育委員会教育部 教育相談室
事業期間	2024 年 4 月 1 日～2025 年 2 月 27 日
事業目的	(1)事業を行う上で達成したい状態 富士見市には現在、いわゆる「不登校」状態にある児童生徒が多数存在しています。その背景には、家庭や学校において、自らの思いや考え、生きづらさ等を言葉にできない状況や、周囲からその状況を受け入れられない状況があると思われます。また学校においては、ときに様々な事情を理由に「いじめ」などを受け、それが原因となって「不登校」状態に至る場合もあると考えられます。 上記のような状況を踏まえ、本事業を通して達成したいことは大きく以下の 2 点です。 1 学校現場や地域に、子どもたちが自らの思いや考え、生きづらさ等を、主体的に言葉にすることのできる「対話の場」を創出すること。 2 子どもたちが、自分たち子どもの権利・人権について理解を深め、互いの抱える多様性や違いを認め合い、互いの思いや考えを大切に聞き合うことができるための「対話の方法」を身につけること。 (2)現在の状況 前述の通り、富士見市内の子どもたちの間には「いじめ」や「不登校」といった課題があり、その解決に向けては、子どもたちが自分たちの権利・人権についての理解を深め、それを互いに尊重できるようになるための、人権教育における取り組みが重要です。この点は、「富士見市教育振興基本計画」の「人権教育の充実」(学校教育課)(30 頁)の項目において、以下のことがらが掲げられていることから、今後より一層力を入れて取り組むべき課題です。 ・発達段階に応じた人権感覚を身に付け、自分の人権を守り、他者の人権も守る意識・意欲・態度を育成します。 ・様々な人権課題を解決するために、体験活動や参加体験型の学習を取り入れ、人権意識の啓発に努めます。 現在市内で行われている人権教育に加え、さらに体験活動や参加体験型を意識した人権教育の機会の充実が必要であると考えます。

(3) 上記(1)(2)の差を解決する方法 対話カフェつむぎは、2021 年 6 月より「対話を通じて人とものごととの間に新しい関係性をつなぐ・つむぐ」をコンセプトに、市内・公共施設等を会場に、様々なテーマ(居場所、家族、いじめ・差別、生きること、暴力など)での「対話カフェ」(「哲学対話」「哲学カフェ」の形を取った対話の場)を開催し、2024 年 2 月現在、10 代から 70 代まで幅広い世代にわたるのべ 100 名以上の方にご参加いただきました。 また不登校、ひきこもりといわれる状況にある方たち、かつてそのような状況にあった方たちが、安心して参加をし、自らの思いを言葉にすることができる場として、「不登校ひきこもり当事者会」を毎月実施し、のべ 50 名以上の方にご参加いただきました。 そして、それらの活動で得たノウハウを生かしつつ、2022 年度から、子どもを対象とした「こども対話カフェ」(「こども哲学」(※)の形式を取った対話の場)を企画・開催しています。 本協働事業においては、この「こども対話カフェ」を、「対話」という参加体験型の形式の人権教育の機会として提案し、市内・公共施設だけではなく、学校現場や教育相談室等における開催を目指します。具体的な対話のテーマとして、子どもたちの間にある「いじめ」や「不登校」、「学ぶ権利」などのテーマを取り上げながら、より子どもの権利・人権教育を意識した機会として企画・開催いたします。 また地域において、本事業のような子どもたちの対話の機会をさらに創出するため、またそのような場の重要性について地域の方たちと共有するため、参加型の「ファシリテーター入門講座」を実施いたします。 (※)「こども哲学」は、なんでも話してもいい、話さなくてもいい、そのようななかで、日常のあたりまえに潜む素朴な問いについて自由に問い、考えることができる場。大切にしたいこととして、自分の感覚や経験から話す、ひとの話を最後まで聞く、相手を否定しないなどがある。参考『自信をもてる子が育つこども哲学』(ワニブックス)		
役割分担	団 体	市内各所における事業・イベントの企画・案内・運営・広報
	市担当部署	事業・企画についての助言 イベント・企画の広報 会場の確保
事業決算額	33,970 円	(市補助金 125,000 円)

2 事業の成果

実施 内容	時期（月）	具体的な内容・場所・対象者
	4 月	教育相談室との打合せ
	5 月 11 日土曜日	こども対話カフェ(第一回) 参加者 0 名のため実施せず
	7 月 13 日土曜日	こども対話カフェ(第二回) 開催 テーマ「性別ってどうしてあるの？」 参加者 1 名
	9 月 28 日土曜日	こども対話カフェ(第三回) 参加者 0 名のため実施せず 教育相談室と今後の会場やテーマについて協議
	11 月 9 日土曜日	こども対話カフェ(第四回) 参加者 0 名のため実施せず
	1 月 18 日土曜日	こども対話カフェ(第五回) 開催 テーマ「友だちと仲良くするには？」 参加者 2 名
	2 月 15 日土曜日	哲学対話体験講座 「言葉を聴く技術を学ぼう！」 講師：山下真実（対話カフェつむぎ） 参加者 18 名
	2 月 22 日土曜日	こども対話カフェ(第六回) 開催 テーマ「やる気を出すってどういうこと？」 参加者 0 名 こども対話カフェ 参加者 のべ 3 名 うち、複数回参加のあったこども 1 名 ※各実施回の詳細報告は別紙にて。
	2 月	教育相談室と協働推進課と事業の振り返り ※その他、毎回の対話カフェの後にも 振り返り・反省会を行った。

事業 効果	市内の全小・中学校・公共施設にて案内を配布し、年間を通じて 6 回の「こども対話カフェ」の実施を目指したが、実際には参加の申し込みが少なく、開催回数は 2 回に留まった。年度途中において、チラシデザインの変更や「こども対話カフェ」の説明動画を作成するなど、広報のあり方の見直し、開催会場の変更、追加のチラシ配布なども行ったが、参加者の増加には繋がらなかった。原因として、①昨年度までと比較してコロナ等の状況が改善したことによる、参加対象の小・中学生の生活状況(習い事等)の変化②「対話カフェ」の内容についての認知が進んでいないことなどがあると考えている。 一方で、昨年度に引き続き、学校での友人関係等に課題や問題意識を有していると思われる参加者が、繰り返し参加をしてくださっていることから、本事業における対話の場が、それらの日常のことがらについて考えるためのよい場となっていると思われる。 昨年度実施した「ファシリテーター入門体験会」について、事業計画段階では今年度も外部から講師を招いて行う予定でいたが、内容を見直し、対話カフェつむぎメンバーである山下真実を講師とし「哲学対話入門体験講座」として実施した。理由として、①本事業「こども対話カフェ」のファシリテーターのほとんどを、これまで山下ひとりが担ってきたことから、他の団体メンバーもそのノウハウを学びながら共に事業を担えるようになる必要性を感じたこと②これまでのこども・大人を含めた本団体における対話の実践について、地域に認知していただく場を設ける必要性を感じたことがある。実際には、地域をはじめ市外からの参加者も含め全体で 18 名の参加者があり、参加者からは「対話の奥深さを知った」「言葉についての深い内容に感銘を受けた」というような感想をいただくことができ、実際の対話の内容からは、地域における対話の機会の必要性や、家庭における親子間の対話の難しさなど、そこにある課題についてお聞きすることができた。それらの現状や課題を、教育相談室と共有することができたことも、今年度の事業の大きな成果であったと考える。
----------	--

3 今後の事業展開について

2025 年度も「こども対話カフェ」を継続する。今年度参加のあった子どもたちをはじめ、さらに多くの子どもたちに、継続して参加してもらうことを目指していく。今後どのような問い・テーマで実施するのか等、一緒に企画・運営をしていくこともできれば願っている。

また、今年度好評であった「哲学対話入門体験講座」については、2025 年度、団体メンバーを講師として実施するものと、外部から講師を招いて実施するものと、合計 2 回の開催を目指し、「こども対話カフェ」の地域における認知を広げる機会、またその場自体が地域で暮らす子どもをはじめ、様々なニーズをもった方たち自身が、安心して対話を行うことのできる場となることを期待する。

4 団体、担当部署の評価等 評価：◎よくできた ○できた △課題である

協働事業の 評価の視点	団体		担当部署	
	評価	コメント	評価	コメント
協働事業を行うにあたり、互いの情報等を共有できたか。	◎	事業の趣旨をよく理解してくださり、相談室の働きをカフェ・講座においてご案内いただいた。	◎	ともに学校訪問を行うなど、情報等の共有ができた。
協働事業の目的を共有できたか。	◎	地域の子どもたちが安心して参加できる場を作るため、一致してよい協力ができた。	◎	子どもにとって安全で安心できる場であることや、思いを語ってよい場であることを共有できた。
協働事業の役割分担は適正だったか。	◎	互いの役割を理解し、よいかたちで協力することができた。	◎	それぞれの長所を生かした役割分担となった。
互いを尊重し、対等な立場で協働事業を実施できたか。	◎	協働するパートナーとして、対等な立場で事業の運営を行うことができた。	◎	互いに、建設的な意見を出し合いながら運営できた。
協働したことにより、地域課題の解決につながったか。	○	地域・保護者の理解を得つつ、子どもたちが安心して対話する場を創出することができた。参加者の現象は今後の課題。	○	子どもの居場所、想いを語れる場としての役割を果たした。取り組みをさらに広げたい。
【団体の感想等】 学校や地域、保護者への案内にあたって、教育相談室との協働はとても心強いもので、子どもも保護者も安心して参加してくださったと感じている。 対話・傾聴をテーマにした講座においては、それに関心をもった多くの市民の参加があり、地域における対話の機会の必要性や、家庭における親子間の対話の難しさなど、そこにある課題についても共有することができた。 今後も地域の子どもたちや家庭のため、引き続きよい協働関係を継続できれば幸いである。				
【担当部署の感想等】 小学生の参加があった。参加者は、自分の生活経験や考えに加え、本音も吐露するなど、子どもが思い受け止めてもらえる場として、意義深い対話となった。一方、参加者が少ないことについては、計画、運営の工夫が必要である。教育相談室としては、学校や教育相談室HPを通じた広報に一層努めていく。				

様式第 1 3 号（第 1 4 条関係）

収 支 決 算 書

事業の名称 こども対話カフェ事業

1 収入の部

(単位 円)

科 目	予算額	決算額	摘 要
市補助金	125,000	33,970	差引残高91,030円を返金。
団体予算	5,000	0	
収入合計	130,000	33,970	

2 支出の部

(単位 円)

科 目	予算額		決算額		摘 要
		うち補助対象額		うち補助対象額	
消耗品費	5,000	5,000	0	0	
印刷製本費	65,000	65,000	33,970	33,970	
報償費	50,000	50,000	0	0	外部講師に依頼せず、団体メンバーが講師を担ったため
旅費	5,000	5,000	0	0	同上
飲食費	5,000	0	0	0	カフェ用茶菓代
支出合計	130,000	125,000	33,970	33,970	